

論 文

# 頼三樹三郎に関する研究への考察

任 萌 萌

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

## Consideration of Research on Rai Mikisaburo

Ren Mengmeng

**Abstract:** Rai Mikisaburo was a Chinese patriot and a poet who lived during the end of the Edo period. Rai Sanyou was a historian and Chinese poet in the late Edo period and is famous as the author of “Japanese Foreign History.” Rai Mikisaburo is Rai Sanyou’s third son. Rai Mikisaburo is not as famous as his father. This research clarifies the current state of research by organizing Chinese poems, writings, letters, brief biographies, and related previous studies on Rai Mikisaburo. The Chinese poems of Rai Mikisaburo were worthy of literary appreciation, but except for “Hundred Poems and Hundred Seals,” there was almost no research on his other Chinese poems. This research also clarifies the process of the establishment of Rai Mikisaburo’s poetry manuscript “ougaishu,” which was not in the researchers’ field of view. Furthermore, as a patriot, Rai Mikisaburo was greatly influenced by Rai Sanyou in terms of thoughts. Additionally, in terms of Chinese poetry, the literary similarities between Rai Mikisaburo and Rai Sanyou were also clarified.

**Keywords:** Rai Mikisaburo, Rai Sanyou, Poet, Patriot

### はじめに

平成28年度、頼山陽記念文化財団は第34回頼山陽記念文化賞に斎藤裕志（当時67歳）を受賞者として選び、表彰した。主な受賞理由は「斎藤家は400年前美濃から松前に渡り、江差町年寄を勤める11代斎藤佐治馬が、蝦夷地遊歴中皮膚病にかかった頼三樹三郎を援け、帰京後も長く親交した。斎藤裕志はその縁から「頼三樹三郎研究会」を立ち上げ、頼三樹三郎が江差文人と詩作交遊した「江差八勝碑」建立に尽力し、書軸や書簡の収集、資料の上梓、講演活動などにより、頼三樹三郎の業績を北海道中心に広めることに貢献した。」<sup>1</sup>である。

頼山陽記念文化賞規定より、受賞対象の一部は頼山陽もしくは頼山陽と関

係のあった人物についての歴史的・文化的な研究、あるいは文化遺産の保存等で成果を上げている個人または団体である。その頼三樹三郎は頼山陽の息子であり、幕末志士・漢詩人である。頼山陽は、江戸後期の歴史家・漢詩人であり、『日本外史』の作者として非常に著名である。しかし、頼三樹三郎については父・頼山陽にともしてそれほど詳しく知られていない。頼三樹三郎については、『国史大辞典』14巻に次のように記されている。

頼三樹三郎、一八二五—一八五九。江戸時代後期の儒者、志士。諱は醇、字は子厚・子春、通称は三木八・三樹三郎・三樹八郎、号は鴨厓・百城・古狂生。文政八年（一八二五）五月二十六日京都三本木（京都市上京区南町）に生まれる。父は山陽、母は梨影、三男。天保三年（一八三二）父を喪い、十一年大坂に下って後藤松陰の塾に入り、かたわら篠崎小竹に学んだが、十四年来坂した羽倉簡堂に伴われて江戸に遊学、昌平坂学問所に入寮した。弘化三年（一八四六）三月上野不忍池に遊び、弁天堂の石燈を倒して寛永寺の咎めを受け、退寮を命ぜられた。同年四月東北漫遊の途につき、九月三廐（みんまや）口から松前に渡り、江差で松浦武四郎と一日百詩・百韻の雅興を楽しんだ。翌四年八月蝦夷地を去って本土に渡り、嘉永二年（一八四九）正月帰京して家塾を守り、梁川星巖・梅田雲浜らの諸儒と交わった。同六年外艦の渡来に皇国の安危にかかわると悲憤慷慨し、安政二年（一八五五）九月母を喪って以来、家を忘れて国事に奔走し、同五年將軍継嗣問題には一橋慶喜の擁立を画策し、四月星巖と謀議して、水戸藩に勅書が降下することを近衛忠熙に入説し、七月には星巖の宅で西郷吉兵衛（隆盛）・大楽源太郎らと時事を議した。同年八月水戸藩に戊午の密勅が降下すると、幕府は安政の大獄を起し、十一月三樹三郎はこれに連坐し。捕えられて六角の獄に投ぜられ、翌六年正月江戸に檻送され、福山藩邸に預けられ、評定所の糺問の後、十月七日死罪を命ぜられ、伝馬町の獄で斬首の上、遺骸は南千住の小塚原に棄てられた。年三十五。極刑の理由は、幕府側が「梁川星巖方へ参会いたし候三樹八郎・池内大学（陶所）・梅田源次郎（雲浜）、右四人反逆之四天王と自称いたし候由」（『公用方秘録』）との情報を得ていたためと思われる。墓は東京都荒川区南千住五丁目の回向（えこう）院、同世田谷区若林四丁目の松陰神社境内にある。明治二十四年（一八九一）贈正四位。

**参考文献** 木崎好尚『頼三樹伝』、宮内省編『（修補）殉難録稿』前篇（吉田常吉）<sup>2</sup>

以上のように、頼三樹三郎の短い生涯は昌平黌在学、蝦夷地滞在、帰京後

の政治活動という三つの段階に分けることができる。

そこで、頼三樹三郎に関する先行研究を分析し、研究現状を明らかにしたい。その上、頼三樹三郎と頼山陽との関わりについて考察する。

## 一 先行研究と問題点

頼三樹三郎については、その著作をすべて集めて編集した書物がないので、研究者にとって不便である。頼三樹三郎の漢詩、文章、書簡、略伝を概括的に論じる中で先行研究の資料と論文を分析するのであるが、頼三樹三郎に関する研究は極めて少ないのが現状である。以下に先行研究を整理する。

頼三樹三郎の漢詩については、額田正三郎編『安政三十二家絶句』下巻（全三巻、津逮堂、1857年）に頼三樹三郎の漢詩が24首載せてある。これは頼三樹三郎が生前に出版された唯一の詩集である。松浦孫太編『一日百印百詩』一冊（多気志楼所蔵、1864年刊、1911年発行）に頼三樹三郎が弘化3年（1846）冬至の日に江差町「雲石楼」で開かれた雅会で作った漢詩100首がある。古松淵臣編『四英獄窓骨董集』二冊（大洲市立図書館矢野玄道文庫所蔵、1868年）に頼三樹三郎が獄中に詠じた詩歌が収録されている。これは安政大獄に連座した頼三樹三郎が福山藩邸に拘禁された際に、同藩邸に共に拘禁された山田勘解由、伊丹藏人、高橋大隅守三士との唱和の詩集である。中に頼三樹三郎の漢詩42首がある。添田静淵編『北溟遺珠』（立命館大学図書館西園寺文庫所蔵、白鳥鶴林堂、1894年）に頼三樹三郎の蝦夷遊歴の一年間における詩57首が収録されている。蒲生重章編『鴨厓集』二冊（仙台市民図書館所蔵、梧溪叢書、1894-1901年）<sup>3</sup>に頼三樹三郎の漢詩が265首載せてある。真田秀吉集録『頼三樹詩集』（共栄社、1960年）では年月をかけて諸家から頼三樹三郎の漢詩を写し取っており、中に564首がある。

以上の詩集以外に、頼三樹三郎の漢詩は新宮貞亮編『京華名勝集』（勝村治右衛門、1870年）、中山轍編『古今英傑詩鈔』（金港堂、1879年）、兪樾撰、佐野正巳編『東瀛詩選』（汲古書院、1981年）、小野湖山著『湖山楼詩屏風』（万青堂、1886年）、堀成之編市島謙吉校『今古雅談』（金港堂、1892年）、狩野徳蔵著『雄鹿名勝誌』（大沢鮮進堂、1902年再版）、市村省三著『詳解近世名詩選』（芳文堂、1933年）、小泉荃三著『維新志士勤王詩歌評釈』（立命館出版部、1938年）、『勤皇文庫』第五巻（社会教育協会蔵版、1941年）、丹澤編『維新勤王志士国事詩歌集』（雄生閣、1944年）、猪口篤志著『日本漢詩』上（『新

積漢文大系』45、明治書院、1972年）、『頼山陽と芸備の文化』（頼山陽記念文化財団、1995年）、藤田東湖編『維新草莽詩文集』（新学社、2007年）などにも見られる。

頼三樹三郎の文章については、蒲生重章編『鴨厓集』二冊及び木崎愛吉・頼成一編『頼山陽全書』（頼山陽先生遺跡顕彰会、1931年）に「唐絶新選後叙」（弘化元年（1844））、「水西莊圖跋」（弘化3年（1846））、「湊川帖跋」（嘉永2年（1849））、「小文規則及古文典刑跋」（嘉永4年（1851））がある。これらは頼山陽の著作を対象として書いた文章である。また、頼三樹三郎は嘉永元年（1848）に出版された『日本外史』、嘉永3年（1850）に発行された『通議』、安政2年（1855）板行新策正本の『新策』などの校勘にも参与した。ここから頼三樹三郎は頼山陽の作品をまじめに読んだことを窺い知ることができる。

頼山陽の著作と関係する文章のほか、添田静淵編『北溟遺珠』（立命館大学図書館西園寺文庫所蔵、白鳥鶴林堂、1894年）に「贈本多佐卿」（弘化4年（1847））、「十適園記」（弘化4年（1847））と「題齋藤周有翁遺歌後」（嘉永5年（1852））3篇の文章がある。蒲生重章編『鴨厓集』二冊に「竹外二十八字詩題言」（年代不明）がある。これ以外に以下の文章も存在する。

嘉永6年（1853）、頼三樹三郎は清・陸紹珩選『酔古堂劍掃』十二卷（早稲田大学図書館所蔵、和泉屋吉兵衛、1853年）の後序を書いた。陸紹珩（字は湘客）が古今の名言嘉句を抜粋し、収録編纂した編著である。書名は本来の書名「劍掃」に、陸家の堂名「推古堂」を合わせたものである。中国においてはほとんど流布しなかったが、日本では江戸時代後期には教養人の間に広く流布し、嘉永6年（1853）に出版されて以降、幕末から明治期にかけていくつかの版が出版された。<sup>4</sup> 安政2年（1855）2月、頼三樹三郎は「阪上將軍木像記」を書いた。坂上田村麻呂、平清盛二人の歴史人物の経歴を借りて軍事方面のことについて言及した。安政3年（1856）正月、頼三樹三郎は魏源の60巻本（道光27年（1847））『海国図志』より印度の部分を引き、訓点を付けて、上巻の冒頭に「刻印度國志序（印度國志を刻する序）」という自序を附して、『翻刻印度図志』と題して版刻した。<sup>5</sup> 『海国図志・印度國部附夷情備采下』三卷三冊（文教大学越谷図書館所蔵、1856年刊）がある。『海国図志』にはキリスト教の記述が多くあり、頼三樹三郎は『南洋西洋各国教門表』<sup>6</sup>を書いた。

頼三樹三郎の書簡については、蒲生重章編『鴨厓集』二冊に頼三樹三郎の書簡「斎藤竹堂（順治）に與ふる書」がある。佐竹義繼編『幕末勤王烈士手翰抄』（実業之日本社、1907年）に「梁川星巖に與ふる書」を載せている。遠山操編『志士書簡』（厚生堂、1914年）に「在江戸の櫻任藏に贈りたる書」が掲載されている。田中真治編『鉄兜及其交友の尺牘』（西播魁新聞社、1929年）に頼三樹三郎は鉄兜宛での書簡がいくつかある。栗野頼之祐「頼三樹三郎の伝記史料について」（攝津米谷、山崎家所蔵『書物展望』12、1942年）に攝津米谷山崎家所蔵の頼三樹三郎書簡並びにその関係文書が収録されている。忍頂寺静村「頼三樹三郎の書簡」（『陳書』14、1942年）に頼三樹三郎の書簡十通が掲載されている。<sup>7</sup> 嘉永末年（1853）より安政5年（1858）まで、淡路洲本の詩人伊藤聰秋との手紙である。江馬文書研究会編『江馬細香来簡集』（思文閣出版、1988年）に頼三樹三郎が江馬細香に宛てた書簡がある。堀川貴司「頼三樹三郎書簡ほか―幕末期書物流通関係資料若干」（『書籍文化史』12、2011年）に頼三樹三郎は河内屋兵衛への書簡がある。この書簡の内容には『日本外史』、『古文典刊』と『日本政記』について言及する。齊藤裕志「頼三樹三郎を語る（2）」（『北海道史研究協議会会報』94、2014年）に頼三樹三郎は日光、古橋石見守宛の書簡がある。ほかに頼三樹三郎と交流のある人々の所に所蔵された書簡もあるが、木崎好尚著『頼三樹伝』（今日の問題社、1943年）に和訳した書簡の内容が年代順に収録されたので、ここでは省略した。

頼三樹三郎の略伝については、蒲生重章著『近世偉人伝』初編上巻（早稲田大学柳田文庫所蔵、青天白日楼、1877年）、馬杉繫著『殉難士伝』（温知塾蔵版、1877年）、小野湖山著『湖山楼詩屏風』（万青堂、1886年）、石津灌園『灌園遺藁』巻三（石津儀一出版、1897年）、依田学海著『談叢』巻一（吉川半七出版、1900年）、岡本韋庵『大日本中興先覚志』巻上（筑波大学図書館所蔵、開導社、1901年）、遠山操編『志士書簡』（厚生堂、1914年）、宮内省編『修補殉難録稿』前篇（吉川弘文館、1933年）、京都府編『先賢遺芳：維新志士遺墨集』（更生閣書店、1935年）、関儀一郎、関義直編『近世漢学者著述目録大成』（東洋図書刊行会、1941年）、大日本人名辞書刊行会編『大日本人名辞書』下巻（講談社、1974年）、国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』14巻（吉川弘文館、1979年）、近藤春雄編『日本漢文学大事典』（明治書院刊、1985年）、石山洋、鈴木瑞枝、南啓治編『江戸文人辞典：国学者・漢学者・洋学

者』(東京堂出版、1996年)などに掲載されている。

頼三樹三郎の伝記研究には、主に木崎好尚著『頼三樹伝』(今日の問題社、1943年)と安藤英男著『鴨崖頼三樹全伝』(吟濤社、1993年)がある。その他に、頼山陽の研究に没頭する研究者たちは頼山陽の三子を検討するとき、頼三樹三郎のことに言及したことがある。例としては市島謙吉著『隨筆頼山陽』(早稲田大学出版部、1925年)と中村真一郎著『頼山陽とその時代』(中央公論社、1971年)がある。

木崎好尚氏は『頼三樹伝』に、頼三樹三郎に関わる書簡、詩歌、諸家の記述など、大量の資料を集めて、頼三樹三郎の生涯の行跡を全面的にまとめた。これは頼三樹三郎の研究に対してとても役に立つ研究書である。中に和訳した詩歌が239首ある。詩歌を年代順に並べ、その中から頼三樹三郎が当時付き合った人、遊歴した場所、心遣いなどを読み取ることができ、文献資料として使われた。本の付録に頼三樹三郎の日譜が付いている。

安藤英男氏は最初に『頼三樹三郎』(新人物往来社、1974年)を上梓した。1993年になると、『頼三樹三郎』の訂正増補版として『鴨崖頼三樹全伝』を完成した。1974年に出版した『頼三樹三郎』の間違った所を訂正し、本文補遺と付録を加えた。伝記の内容は木崎好尚著『頼三樹伝』に従い、ただ漢詩の原文と訓読の両方を付けている。それに、漢詩補遺を行い、漢詩初句索引、頼氏略系図、頼三樹三郎の東国遊歴要図を添付している。これはとても便利な本であるが、現代日本語で訓読することと細かいミスがあることに注意すべきである。

木崎好尚氏と安藤英男氏は頼三樹三郎の伝記を作るため、可能な限りの大量の文献資料を収集した。頼三樹三郎の漢詩には、頼山陽のことに言及するもの、頼山陽と同じ対象に対して詠んでいるもの、頼山陽の漢詩に次韻して作るもの、数首がすでに頼三樹三郎の伝記研究に指摘された。しかし、二人とも頼三樹三郎の漢詩を文献資料として利用し、伝記の一部を構成する。あくまでも伝記的研究なので、頼三樹三郎の漢詩を精読しておらず、個々の詩作に踏み込んだ検討は未だ十分になされていない。

頼三樹三郎の漢詩研究には『「百印百詩」を読む』(江差町の歴史を紀行し友好を進める会、2000年)という本がある。これは松浦孫太編『一日百印百詩』の解説書であり、百首の詩に解釈を施した。この本が出版された後、『百印百詩』に関する論文もいくつかが出でる。石川忠久氏「岳堂詩話(十九)

頼鴨厓と百印百詩」（『學鐙』98（10）、2001年）、渡部英喜氏「東北の漢詩（12）頼三樹三郎「橋霜店月」詩について」（『東北文学の世界』20、2012年）、「頼三樹三郎の「清晨」詩について」（『日本文学会誌』24、2012年）、齊藤裕志氏「頼三樹三郎を語る（1）」（『北海道史研究協議会会報』93、2013年）と「頼三樹三郎を語る（2）」（『北海道史研究協議会会報』94、2014年）である。これらの論文の作者すべては『一日百印百詩』の漢詩について研究し、『一日百印百詩』に関する文献資料を提供した。論文掲載の時期は『「百印百詩」を読む』を発行した後である。この研究現状は江差町の歴史を紀行し友好を進める会が頼三樹三郎の遺業を顕彰する成果であろう。

管見の限りでは、頼三樹三郎の『一日百印百詩』以外の漢詩に関する研究が見られない。頼三樹三郎の漢詩に関しては、全体的注釈・解説が存在しておらず、その漢詩人としての全貌はこれまでほとんど明らかにされていない。

## 二 頼三樹三郎の詩文稿『鴨厓集』

頼三樹三郎の詩文稿は安政大獄の際に幕吏に押収され、その後、門人が収録したものが禁門の変で類焼された。ただ頼三樹三郎の詩作の一部は諸家に保護されていた。木崎好尚氏は『頼三樹伝』を執筆した時に多くの紙数を見た。詩文は650枚、書簡は200枚である。この著作に目を通して、中に額田正三郎編『安政三十二家絶句』、松浦孫太編『一日百印百詩』、古松淵臣編『四英獄窓骨董集』、添田静淵編『北溟遺珠』を資料として使われていることが窺える。しかし、この伝記には蒲生重章編『鴨厓集』という書物が存在していない。真田秀吉は『頼三樹詩集』の前言に列挙した書物に『鴨厓集』を含まない。安藤英男氏の『鴨崖頼三樹全伝』は木崎好尚氏の研究を踏まえつつ真田秀吉集録『頼三樹詩集』を参照したが、中にも『鴨厓集』について言及しない。

つまり、『鴨厓集』という書物はまだ研究者たちの視野に入っていないのである。『鴨厓集』の著者は頼三樹三郎であり、編集者は蒲生重章などである。蒲生重章（1833-1901年、字子闇、号褻亭、又精庵、越後人）は依田学海の友人であり、『近世偉人傳』の著者として名声が高かった。尊王攘夷思想を持ち、志士たちとの交流もあった。<sup>8</sup> ここで『鴨厓集』の成立経緯を明らかにしたい。

山内知也氏論文の付録の年譜によれば、嘉永4年（1851）蒲生重章は下谷

吟社の大沼枕山に師事した。安政4年（1857）11月17日、小野湖山を訪ねて、湖山の旧雨社に入った。その社に重野安繹、岡鹿門、森春濤などと親交を持つきっかけを作った。<sup>9</sup> 岡鹿門は『近世偉人伝』に序を寄せて、小野湖山と共に評者として『近世偉人伝』に寸評を加えている。<sup>10</sup> 『近世偉人伝』の「頼三樹八郎伝山陽遺稿行状八郎作三郎」に岡鹿門のコメントがある。

岡鹿門曰、子春東游淹滯我藩數月。余時十四五、嘗見子春于一醫生之處、磊魁奇偉、一見知其為不凡人。惜當時童卵、不能吐一奇語敲其一斑。

岡鹿門曰く、子春 東游して我が藩（仙台）に淹滯すること数月なり。余は時に十四五、嘗て子春を一醫生の処に見て、磊魁奇偉にして、一見其の不凡人たるを知れり。惜むらくは当時童卵にして、一奇語を吐いて其の一斑を敲くこと能はざりしなり。<sup>11</sup>

それに、岡鹿門は『北溟遺珠』に序文を寄せて、頼三樹三郎と仙台に会ったことが二度であると強調した。

因思鴨崖此遊、過仙臺、留數月。余時十五六歳、見於戈醫師坐、面貌魁偉。余以年少、不敢接言語、自傍觀其作字。

因って鴨崖 此の遊を仙台に過ぎり、留まること数月なるを思ふ。余時に十五六歳、戈醫師の坐に見ゆ、面貌魁偉なり。余 年少を以て、敢へて言語を接せず、傍より其の字を作るを觀る。<sup>12</sup>

岡鹿門は小野湖山、谷太湖と共に頼三樹三郎の漢詩集『北溟遺珠』に評語をつけた。小野湖山は蒲生重章と親しく付き合っただけではなく、頼三樹三郎と同じく梁川星巖が起こした玉池吟社の社友となり、国事に奔走していた。小野湖山編『湖山楼詩屏風』<sup>13</sup>に頼三樹三郎の略伝と詩がある。

『鴨厓集』には大槻修次より送られた頼三樹三郎の漢詩が多く収録されている。大槻修次は仙台藩儒者大槻磐溪の次男として江戸に生まれた。大槻修次が頼三樹三郎の漢詩を所蔵するのは、頼氏は大槻家の大槻一族と詩文の交流があったからである。

以上のように、蒲生重章、岡鹿門、小野湖山、大槻修次など同じ好みを持つ人々が文化圏を作り上げて、頼三樹三郎の詩文、書簡などを集めることができた。蒲生重章が『鴨厓集』を編集できたことは頼三樹三郎と関わりがある人々との付き合いがあったからであると考えられる。

『鴨厓集』の成立年代について、国文学研究資料館の提供する情報にはただ明治（1868-1912年）と書いていて、明確な時期が不明であった。山内知也氏は蒲生重章の生涯と文学活動を次のように、「（1）勤皇医師から医学館就職（明治元年・一八六八）まで。越後村松藩に生まれ、江戸で医学修業する過程で勤皇運動に入り、勤皇詩人を歴訪して漢詩人として世に立つことを熱望していたころ。（2）法制局に入ったが失職し、一時隠退した後修史局に入り、伝記資料に接し、私史創作への志を持つ。しかし西南の役（明治十年・一八七七）の勃発で失業。『近世偉人伝』と『近世佳人伝』の刊行により生活が向上し門人も増加し、漢詩人たちとの交流が盛んになる。（3）五十歳以後の文人としての文筆業に入った時期。斯文学会に参加して漢文学の再興を期待するが、日清戦争勃発前後からその困難を自覚してゆく。最後は突然の中風発病により生涯を終わる。」<sup>14</sup>と、三期に分けた。恐らくは、蒲生重章は第三期に入ってから親しかった文人たちと頼三樹三郎の漢詩を収集し、『鴨厓集』を編纂し始めたと考えられる。

明治10年（1877）に発行された蒲生重章著『近世偉人伝』初篇上巻には「頼三樹八郎伝山陽遺稿行状八郎作三郎」があり、この略伝は『鴨厓集』に最初の文章として収録されている。西村時彦編『維新豪傑談』（春陽堂、明治24年（1891））に「古狂生」と題する頼三樹三郎の逸事があり、堀成之編市島謙吉校『今古雅談』（金港堂、明治25年（1892））に「頼三樹春雨の曲を踐す」があり、これらの文章は『鴨厓集』に収録されている。それに、頼三樹三郎の弘化4年（1847）9月に詠じた「宿加茂村（加茂村に宿す）」詩は、『鴨厓集』に収録されている。その詩題の後に「『雄鹿名勝誌』、秋田・狩野徳蔵著、明治二十五年出版」とある。明治27年（1894）に発行された添田静淵編『北溟遺珠』中の文3篇が『鴨厓集』に収録されている。

以上の記録により、『鴨厓集』の成立年代は明治27年（1894）以後である可能性が高いと考えられる。蒲生重章は世に生きているうちにこの詩集を編纂したが、晩年の作業のため亡くなるまでずっと出版できなかった。現在は写本のまま仙台市民図書館に所蔵されている。2021年、デジタル版が新日本古典籍総合データベースに公開された。

『鴨厓集』には頼三樹三郎の漢詩が200首余りあり、その中に木崎好尚著『頼三樹三郎伝』、真田秀吉集録『頼三樹詩集』、安藤英男著『鴨厓頼三樹三郎全伝』などに収録されていない漢詩が80首ある。『鴨厓集』を頼三樹三郎漢詩研

究の対象の一つとして視野に収めるべきであると考えられる。

### 三 頼三樹三郎と頼山陽の関わり

頼山陽には三男子があつて、長兄聿庵、次兄支峰、三男が三樹三郎である。しかし、三子の中に頼山陽の皇道精神<sup>15</sup>を実践したのは頼三樹三郎のみである。これについては、入谷仙介氏は『頼山陽 梁川星巖』で「聿庵は祖父の跡を継いで広島藩儒となった。その子孫が広島頼氏である。支峰は山陽の跡を継いで町儒者として塾を経営した。その子孫が京都頼氏である。鴨崖は父の激しさを受けついで、梁川星巖らとともに政治活動に突入して、安政の大獄で刑死した。」<sup>16</sup>と指摘した。また、真田秀吉集録『頼三樹詩集』の校正者である西村南岳氏が「真田老博士の心血をそゝがれた頼三樹詩集に就て」で「処でこの三樹の詩集は何故刊行されねばならなかつたのでありませうか。山陽先生には三男子がありまして、長兄聿庵次兄支峰三男がこの三樹三郎でした。が山陽の皇道精神を実践したのは三樹丈でありました。」<sup>17</sup>と述べた。頼三樹三郎の才能と志については、森鷗外の師として知られた依田学海が書いた「頼三樹伝」に次のような記述が見られる。

三樹才敏、而不多讀書。作詩文、求前人未道者言之、落想驚人。語不雅馴、動為儕輩所訾毀、三樹不顧、大言曰、「吾豈老死於文字者」。居三年歸京師、下帷教授。以其為山陽子且善書、聲名漸著。而書法初酷似山陽、後一變學祝枝山。又學詩梁星巖、以其多疵瑕、每為所呵責。安政文久間、外國事起、諸喜事者、多聚京師、主論攘夷、意在興復王室。初山陽著『日本外史』、托事於將門、傾心於朝廷、至叙楠氏之事、蓋三致意焉。三樹竊欲繼父志、與浮浪結交、又與水府留守鶴岡吉右善、遂謀下密敕於水府、以攘夷撼幕府、事發覺、與謀者皆見捕。

三樹 才敏にして、而かも多く書を読まず。詩文を作るに、前人の未だ道はざる者を求めて之を言ひ、落想 人を驚かす。語は雅馴ならずして、動もすれば儕輩の訾毀する所となるも、三樹は顧みず、大言して曰ふ、「吾れ豈文字に老死する者ならんや」と。居ること三年にして京師に帰り、帷を下して教授す。其の山陽の子たりて且つ書を善くするを以て、声名漸く著はる。而かも書法は初め山陽に酷似せしが、後に一變して祝枝山を学ぶ。又た詩を梁（川）星巖に学ぶも、其の疵瑕多きを以て、毎に呵責する所となり。安政・文久間、外国の事起る、諸もろ事を喜ぶ者、多く京師に聚まり、主として攘夷を論ず、意王室を興復するに在り。初め山陽『日本外史』を著

はし、事を将門に托して、心を朝廷に傾け、楠氏の事を叙するに至っては、蓋し三たび意を致せり。三樹 窃かに父の志を継がんと欲し、浮浪と交を結び、又た水府の留守鵜飼吉右（衛門）と善し、遂に密敕を水府に下し、攘夷を以て幕府を撼かさんことを謀り、事 発覚して、謀に與かる者 皆捕へらる。<sup>18</sup>

ここからわかるように、頼三樹三郎はただの文人に止まることに満足するのではなく、父の志を継いで、尊王攘夷の志士として心を朝廷に傾けた。頼山陽と頼三樹三郎父子二人の関係については次のような論述がある。

木崎好尚氏は『頼三樹伝』で「山陽—三樹の父子両先生は、全く大楠公—小楠公との、一つの対照として見られはすまいか。大楠公なくして小楠公は。山陽あらざりせば三樹は。」<sup>19</sup>と、この父にしてこの子ありということを述べた。真田秀吉は『頼三樹詩集』の序に「父山陽は徳川幕府は正道にあらずとて王政復古を鼓吹した、三樹は其影響を受けたものであって、共に明治維新の原動力をなした。」<sup>20</sup>と書いた。中村真一郎氏は『頼山陽とその時代』で「鴨厓は自ら父の志を継ぐと称していた。幼い時に父を失った鴨厓は、節齋や竹外やの硬派の人々から、硬派としての父の面影を繰り返し数えられ、本気で父の志を継いでいるものと信じて死んで行ったろう。しかもそのように、鴨厓の行為を父の志の延長であると信じていたのは、鴨厓自身だけではない。この第三の世代（政治の世代である。安政の大獄によって挫折することで、却って日本の政治的革新を促進させる役割を演じた世代である。）全体が、山陽を自分たちの理想に引きつけて理解していたのである。現に鴨厓の親友出会った彦根の谷太湖は、鴨厓の死刑を歌った詩のなかで、「地下ニ阿爺、迎へて一笑セン」といっている。あの世で山陽が鴨厓を喜び迎えたに相違ない、というのである。こうした山陽観は、安政の世代から、維新の運動のなかで愈々鮮明になり、山陽は尊王倒幕の最高のイデオログのひとりとして、後衛の頂上に立った。」<sup>21</sup>と論じた。安藤英男氏は『鴨崖頼三樹全伝』において木崎好尚氏と同じく、「頼三樹三郎はその父山陽の家学を伝承し、若くして警世の志に充ちていた」<sup>22</sup>と指摘した。

いずれの研究も尊王攘夷派の志士としてのレッテルを頼三樹三郎に貼って、思想の方面から頼山陽と比較して論じる傾向がある。その一方で、漢詩人としての頼三樹三郎はどのようなイメージを持つのであろうか。

前述した第34回頼山陽記念文化賞の受賞理由には頼三樹三郎が江差文人

と詩作交遊したことを言及した。『北溟遺珠』を編纂した添田静淵は自序に頼三樹三郎の才学を次のように評価した。

蓋山陽翁、一遊耶馬溪、而谿名著于天下。遣鴨崖遺稿、傳播世間、則北海名勝之著于天下、亦必不如今日、世人為曠漠之野、夷族之鄉也。然則、眇乎遺珠、其關係不少也。噫、鴨崖才學非尋常書生之比、而志業不成、中年死于安政大獄。真可悲也夫。

蓋し山陽翁、一たび耶馬溪に遊んで、而して谿の名、天下に著はる。鴨崖の稿を遺りて、世間に伝播せしむれば、則ち北海名勝の天下に著はれんこと、亦た必ず今日、世人の曠漠の野、夷族の郷と為すが如くならざらん。然らば則ち、眇乎たる遺珠も、其の關係するところ少なからざらん。噫、鴨崖 才学は尋常書生の比に非ずして、而れども志業成らず、中年にして安政の大獄に死せり。真に悲しむべきかな。<sup>23</sup>

当時まだ「耶馬溪」の名がない山国溪谷は頼山陽が九州遊歴の時に書いた「耶馬溪図巻記」によって名勝地になった。北海道の名勝は頼三樹三郎の詩作によって名が高まった。頼三樹三郎の詩才を頼山陽に比して高く評価したのである。頼龍三氏蔵『唐宋八大家評語写本』には「三樹三郎父に肖て詩文を善くす。又、筆道にも達し、其體父と同じからず別に一家の風をなし、世人之を賞玩す。而して此書は父が僧雲華の為に加記詳論せし處を謹嚴なる細楷にて寫し、その跋語は書体をも臨模せるものなり」<sup>24</sup>とある。頼三樹三郎は父に似て詩文が上手であることを話した。長松幹（1834-1903年）は「書頼三樹詩草後（頼三樹詩草後に書す）」に頼三樹三郎の漢詩について次のように評価した。

三樹詩才敏捷、今觀其詩草、塗抹刪改、幾不存一字。見其在江刺港云々、及背母睽兄取辛苦等語、盖游蝦夷時手稿也。三樹死義、年僅三十餘。其遊蝦夷時、氣盛心壯、彫蟲小技、宜不經意。而慘澹經營不苟若是、是其遇大事不肯糊塗處、所以尤為不可及也。

三樹 詩才は敏捷にして、今 其の詩草を觀るに、塗抹して刪改すること、幾ど一字を存せず。其の江刺港に在る云々、及び母に背きて兄に睽きて辛苦を取る等の語を見るに、蓋し蝦夷に遊ぶ時の手稿なり。三樹 義に死す、年僅か三十餘り。其の蝦夷に遊ぶ時、氣盛んに心壯んにして、彫蟲小技、宜ど經意ならざり。而れども慘澹たる經營は苟くも是の若からず、是れ其の大事に遇ひて肯へて糊塗さざる処、尤も及ぶべかざると為す所以なり。<sup>25</sup>

この記述により、頼三樹三郎は詩作が素早い、漢詩を作った後はほとんど訂正するところがないことがわかる。その詩才があつてこそ一日以内に百首の五絶を作られるのであろう。猪口篤志著『日本漢詩』上に「鴨崖が昌平黌に学んだころ、仙台の斎藤竹堂と相知るに至り、深く親交を結び、共に佐藤一斎や梁川星巖に従遊して古文辞を修め、最も詩を善くした。竹堂が戯れて、「君は崔駟・王勃の流亜だ」といったら、鴨崖は悦ばないで、「大丈夫天下の為に奇計を画し鴻烈を奮ふ能はずして、寧んぞ布衣を以て老を泉石に終え、煙波釣徒一流の人とならんや」といったという。<sup>26</sup> その志を見るべきである。しかしながら、天賦の詩才は曾て蝦夷地江刺で故人松浦弘と会し、一日百詩を作り、奇気横溢を以て称せられた事を以て窺うことができる。その「獄中作」は大橋訥庵がその墓碑に刻したものであるが、烈々たる気概を写している。<sup>27</sup>と、依田学海著『談叢』の「頼三樹伝」中の逸話を借りたが、頼三樹三郎の一日百詩を作ることを言及し、天賦の詩才があることを肯定した。安藤英男氏は『鴨崖頼三樹全伝』に「三樹には詩人としての天分が豊かで、その詩才においては祖父の春水、父の山陽の名を辱めなかった」<sup>28</sup>と評価した。

以上の諸説からわかるように、頼三樹三郎は頼山陽ゆずりの詩才があり、漢詩文作品が文学的鑑賞に十分に堪え得るものである。では、頼三樹三郎は思想の方面だけではなくて、漢詩にも頼山陽の影響を受けた可能性があるのだろうか。

栗野頼之祐氏「頼三樹三郎の伝記史料について」に攝津米谷山崎家所蔵の頼三樹三郎書簡並びにその関係文書を掲載した。山崎家に頼三樹三郎の書簡を所蔵するのは山崎士行（有堂）が頼三樹三郎の最も親しい学友の一人であったからである。二人とも大阪の後藤松陰塾に入門し、篠崎小竹にも師事した。その論文に山崎家に伝わった頼三樹三郎の自筆写本『雑詠』を紹介した。内容は以下の通りである。

その大きさ縦十六・五糎、横十一・八糎、全文十二頁、表紙には「雑詠頼醇」と書し、内容は漢詩総数百八十七首、中、山陽九十九、茶山七十四、新甫十三、春水十一といった作品を収めてある。

題跋に「余常愛茶翁之詩、一朝偶然看諸等之作、起愚意終寫之到夜、稍成時己亥中秋既望也。 成童 頼醇書 印 印」

己亥、即ち天保十年七月十五日、三樹時に十五歳、方に松陰塾へ入る一年前のことである。更にこの書巻の裏に「此巻余幼時所手寫也、今以贈山崎

士行君、卷中雖字措不調草蕪甚、然詩者皆諸名家之魁作也、願士行君不見其字、而賞其詩則可也。辛丑暮秋頼醇書之於松陰塾之西窓時雨初晴松翠如洗」

辛丑は士行が入塾した天保十二年、この後書によるとその暮秋三樹が下級の塾友士行にこの書を贈ったことが判る。

就中、本手写本は三樹の伝記史料として極めて重要なものの一つであるが、その理由は、本書から三樹の初期に於ける詩風の據って来るところを明にし得べく、また成童以前の自書の学修書として、恐らく唯一無二の貴重文書ではないかと思ふ。<sup>29</sup>

ここで特に注意したいのは、『雑詠』に頼三樹三郎の手写した漢詩総数は187首であり、中に頼山陽の漢詩99首を取めていることである。これにより、頼三樹三郎は頼山陽の詩を大切にしてい、教本として漢詩の作法を学んだことが窺える。

また、蒲生重章は「頼三樹八郎伝火陽禮行君」に次のように書いている。

善諷子曰、予與子春之兄支峰交善、支峰亦夙抱奇憂、好飲酒、而慷慨、時々説子春事。余因知其為人。又讀松浦多氣四郎所刻子春一日百詩、而知其詞鋒類父。嗚呼、吾雖不見子春、猶見子春也、悲乎。

善諷子曰はく、予 子春の兄支峰と交はること善し、支峰も亦た夙に奇憂を抱き、好んで酒を飲み、慷慨し、時々子春の事を説く。余因つて其の人と為りを知る。又た松浦多氣四郎が刻する所の子春一日百詩を読んで、其の詞鋒 父に類するを知る。嗚呼、吾れ子春を見ずと雖も、猶ほ子春を見るがごときなり、悲しいかな。<sup>30</sup>

『一日百印百詩』を読むことを通して、頼三樹三郎の漢詩、文辞の才能が頼山陽と似ていることをわかると述べている。頼三樹三郎は漢詩にも頼山陽の影響を受けたことがあると考えられる。

## おわりに

本稿では、頼三樹三郎の漢詩、文章、書簡、略伝、関連する先行研究を整理し、研究現状を明らかになった。その上、頼三樹三郎の漢詩が文学的鑑賞に十分に堪え得るものであるにもかかわらず、『一日百印百詩』以外にほとんど研究が進んでいない現状を指摘した。そして、研究者たちの視野に入っていない頼三樹三郎の詩文稿『鴨厓集』の成立経緯を考察した。さらに、尊王

攘夷派の志士としての頼三樹三郎は、思想の方面において頼山陽から多大な影響を受けたことを究明した。その一方、漢詩人としての頼三樹三郎は、文学の方面にも頼山陽と似ていることを分析した。

## 注

<sup>1</sup> 頼山陽記念文化財団のホームページを参照。

<sup>2</sup> 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』14巻（吉川弘文館、1979年）。そのほか、近藤春雄編『日本漢文学大事典』（明治書院刊、1985年）と石山洋、鈴木瑞枝、南啓治編『江戸文人辞典：国学者・漢学者・洋学者』（東京堂出版、1996年）にもある。

<sup>3</sup> 『鴨屋集』の成立年代について、新日本古典籍総合データベースにはただ明治（1868-1912年）と書いて、明確な時期が不明であった。筆者は1894年から1901年までの間に成立したと考える。これについては第二節に詳しく検討する。

<sup>4</sup> 合山究編『酔古堂剣掃』（『中国古典新書』88所収、明德出版社、1978年、11-20頁）。

<sup>5</sup> 日本における『海国図志』の受容状況は源了圓「幕末・維新时期における『海国図志』の受容—佐久間象山を中心として」（『日本研究』9、1993年）、阿川修三「『海国図志』と日本—塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本について」（『言語と文化』23、2011年）、『海国図志』と日本 その2 一和刻本、和解本の書物としての形態とその出版意図について」（『言語と文化』24、2012年）などが詳しい。

<sup>6</sup> 『国書総目録』（岩波書店、1963年）所収、日本基督教史関係と漢書目録による。

<sup>7</sup> 忍頂寺務自筆稿本『訪書雜録』（大阪大学附属図書館編『忍頂寺文庫目録』、大阪大学附属図書館所蔵、2011年、639-644頁）にもある。

<sup>8</sup> 長田和也「『近世佳人伝』「花扇伝」の典拠と梁川星巖」（『和漢比較文学』58、2017年）。

<sup>9</sup> 山内知也「蒲生重章の生涯と漢文小説 付年譜」（『斯文』112、2004年）。

<sup>10</sup> 『近世偉人伝』は蒲生重章がまず本文を書き、それに寸評者がコメントを加えるという形式をとっている。

<sup>11</sup> 蒲生重章著『近世偉人伝』初編上巻（早稲田大学柳田文庫所蔵本、青天白日楼、1877年）。

<sup>12</sup> 添田静淵編『北溟遺珠』（立命館大学図書館西園寺文庫所蔵、白鳥鶴林堂、1894年）。

<sup>13</sup> 小野湖山編『湖山楼詩屏風』（国立国会図書館所蔵、万青堂、1886年）。

<sup>14</sup> 山内知也「蒲生重章の生涯と漢文小説 付年譜」（『斯文』112、2004年）。

<sup>15</sup> 頼山陽の政治思想については新しい研究がある。濱野靖一郎著『頼山陽の思想：日本における政治学の誕生』（東京大学出版会、2014年）に頼山陽は必ずしも反徳川・倒幕ではなかったが、後世が反体制として理解したという論がある。しかし、頼山陽の『日本外史』が幕末志士達を尊皇倒幕にかり立てたのは事実である。頼山陽の意図を離れた効果を、『日本外史』が持ったことは否定しようがない。維新时期に頼山陽をその思想に取り入れた代表者として、吉田松陰、橋本左内を取り上げる。くしくも、と

もに、安政の大獄によって命を落とした二人である。頼三樹三郎はその二人と同じように頼山陽をその思想に取り入れて安政の大獄によって命を落とした。

<sup>16</sup> 入谷仙介注『頼山陽 梁川星巖』（岩波書店、1990年、335頁）。

<sup>17</sup> 真田秀吉集録『頼三樹詩集』（共栄社、1960年、83頁）。

<sup>18</sup> 依田学海著『談叢』巻一（国立国会図書館所蔵、吉川半七出版、1900年）所収。

<sup>19</sup> 木崎好尚著『頼三樹伝』（今日の問題社、1943年、4頁）。

<sup>20</sup> 真田秀吉集録『頼三樹詩集』（共栄社、1960年、2頁）。

<sup>21</sup> 中村真一郎著『頼山陽とその時代』（中央公論社、1971年、162頁）。市島謙吉著『隨筆頼山陽』（早稲田大学出版部、1925年、52頁-61頁）にも頼三樹三郎に関する記録がある。

<sup>22</sup> 安藤英男著『鴨崖頼三樹全伝』（吟濤社、1993年、2頁）。

<sup>23</sup> 田静淵選『北溟遺珠』（立命館大学図書館西園寺文庫所蔵、白鳥鶴林堂、1894年）。

<sup>24</sup> 『先賢遺芳：維新志士遺墨集』（京都府編纂、更生閣書店、1935年、105頁）所収。

<sup>25</sup> 蒲生重章編『鴨厓集』（仙台図、梧溪叢書、1894-1901年）所収。

<sup>26</sup> 天保3年（1832）、篠崎小竹が『山陽詩鈔』に寄せた序文の末尾に「雖然、子成豈獨欲以詩文傳世者乎哉（然りと雖も、子成豈に独り詩文を以て世に伝ふることを欲する者ならんや）」と述べる。頼山陽は詩人と呼ばれることを好まなかったが、詩人としての天賦が豊富である。この点について、頼三樹三郎は頼山陽と一緒にあろう。

<sup>27</sup> 猪口篤志著『日本漢詩』上（『新釈漢文大系』45、明治書院、1972年、350頁）。

<sup>28</sup> 安藤英男著『鴨崖頼三樹全伝』（吟濤社、1993年、11頁）。

<sup>29</sup> 栗野頼之祐「頼三樹三郎の伝記史料について」（攝津米谷、山崎家所蔵『書物展望』12、1942年）。

<sup>30</sup> 蒲生重章著『近世偉人伝』初編上巻（早稲田大学柳田文庫所蔵本、青天白日楼、1877年）。五弓雪窓著『事実文編』四巻（関西大学出版、1980年）にもこの伝記がある。蒲生重章は『近世偉人伝』では著者としてのほか善諷子の号で文および人物の寸評を載せている。